

郷土資料

昭和三十三年四月三十日

第八十六回史跡めぐり資料

(里見公園  
真向の手虎奈)

越谷市郷土研究会

山崎善司  
置宗一

案 内

越谷駅<sup>京武</sup>——牛田駅<sup>東武</sup>——関屋駅<sup>京武</sup>——市川真間駅<sup>東武</sup>——真間の継橋、千足奈聖堂

——弘法寺(泣石、枝垂桜、大駒形墓石等)——<sup>バス</sup>里見公園(城跡、茶畑草舎、組合石棺、  
 杖泣石、小笠原貞頼の墓)——<sup>歩</sup>公民館前——<sup>バス</sup>下矢切——<sup>歩</sup>西蓮寺野菊の墓、文学碑、  
 矢切の渡<sup>船</sup>——<sup>歩</sup>茶又——<sup>歩</sup>帝釈天——<sup>歩</sup>茶又駅<sup>京武</sup>——関屋駅<sup>東武</sup>——<sup>歩</sup>牛田駅<sup>京武</sup>

越谷駅

小説「野菊の墓」文学碑

昭和三十一年十月、松戸市下矢切の西蓮寺境内に  
遷設された。碑面には「野菊の墓」の次の一節が  
刻まれている。

僕の家といふは矢切の獲りを東へ獲り小高の岡の上で  
やはり矢切村と云っている所。崖の上になつてゐるので  
利根川は勿論中川までもがすかに見え、武蔵  
一帯が見獲される。秩父から足柄箱根の山々、富士  
の高峰も見える。東京の上野の森だと云ふのもそれら  
しく見える。

村はづれの坂の降口の大きな銀杏の樹の根で民子の  
来るのを待った。ここから見おろすと少りの田園がある。  
色よく黄ばんだ晩稻に露をおいてツツトリと打伏  
した光景は、気のせえが殊に清々しく、胸のすくやうな  
眺めである。(原文のまま)



# 伝 小笠原貞頼夫妻の墓

と標した二本の本標を立てて帰ったと伝えられている。

千葉県市川市内国府台城趾に豊満宗經率寺がある。境内に歴代任職を慕る墓地の一隅に「伝小笠原貞頼夫妻の墓」と伝えられる二基の五輪塔が並べて建てられている。其の五輪塔は高さ四メートルにも及び立派なもので、刻銘は「爲圭山瑞雲居士寛永十七年上章七月二日」と有る。此の貞頼は信濃国深志一長野県松本市一城の城主小笠原長時の子孫と云われ、秀吉小田原北條の攻略に従軍し、又朝鮮の役には軍檢使として朝鮮に渡ったが、文禄二年帰国して肥前名護屋の陣營に伺候した。

其の時徳川家康の努力によって、無人島の岡坂が許されたので、家康の命により伊豆下田を出帆し南海に航して一つの島を発見し、其れを自の姓を取って「小笠原島」と名付け

日本国天照皇大神宮地島長源家康公幕下

小笠原四位少将民部大輔源貞頼朝臣

日本国天照皇大神宮地島長源家康公幕下

小笠原四位少将民部大輔源貞頼朝臣

其の史実となる「徳川実紀」に「小笠原系譜」等には名は見当らず、生歿不明の謎の人物である。小笠原島守院定規墓金志旨言「山岡鉄太郎他島民三氏至起人」明治二十二年七月は貞頼公の二百五十回に当る云々と云う記事がある。貞頼の没年を記事から推算すると一六四〇年七月に当り五輪塔の刻銘の年月に一致する。よって貞頼は寛永十七年迄は生存して居た事になる。從寧寺に付ては五十九回史跡めぐり資料に於て詳細に發表されている。

小笠原氏と同宿との関係は元和五年小笠原正信が古河より岡宿に入封「二万二十余石」岡宿城主として在城。寛永十七年子の貞信が美濃の高嶺移封した「徳川実紀」には「小笠原正信寛永十七年七月二日三十四才卒」と有り此れ又五輪塔の刻銘と年月日が合致する。問題は「圭山瑞雲居士」は誰の法号であるか。

新人物往來江戶史研究会より引用

鎌倉市郷土研究会 理事 日置宗一記

## 市川市観光誌本より

市川市は千葉県の西北部に位置し、江戸川を境に東京都と接して居り、市の北部は台地となし、江戸川を隔て、西に葛飾平野が広がり南は東京湾に臨んで居ります。

本市の歴史は非常に古く縄文時代における下総台地は古代人の理想郷であり、大化の時代には此処に國府が置かれ、その後、徳川時代には幕府直轄所領に属し下総国の文化の中心として発展をとげて来ました。

## 國府台

里見公園

國府台の台地に五万平方メートルの面積を持つ洋式庭園で、園内には大きく敷きつめた芝生園、噴水池、児童公園地などの施設があり、その他に梅、桜、並木、花壇があり四季の花が咲き乱れ、訪れる人の目を楽しませて居る。特に桜の名所として、その時期になると、近郷の人達も集って大衆賑いを見せている。公園の西側付丘になつており其の下に江戸川が

流れている。此処からの展望は極めて良く、眼前に葛飾平野が広がり、遠く富士の靈峰が望める程に囲まれた静かな公園である。

園内は総て古戦場であり、戦国時代房州に城を構えた里見氏と小田原の北条氏が関東の雄を決しようとして前後二回にわたつて激しく合戦した場所である。又総寧寺境内の遺構が示すように、太田道灌が千葉侵略の橋頭堡を此処に築いた。これが後に云う國府台城である。昭和三十四年に人々の憩の場として市川市が公園を設けた。

## 羅漢の井

公園の南側、崖に十ヨロ十ヨロと清水が湧いて居る所がある。此れが羅漢の井である。此の井戸は高台にあつて水源が乏しいにもかかわらず年中清水が湧き、干天の時も枯渴する事が無く、里見一族が布陣の折、飲料水として使用したと思われる。

又一説には弘法大師巡礼の折に発見し里人に汲水を勧めたとも云われ、道徳の程は確かたは無いが、見るからに幽寂の感が有り、一掬の水は良く冷気を覚えさせる。

## 紫烟草舎

此の建物は、明治、大正、昭和の三代にわたつて詩から童謡まで幅広い文学詩人北原白秋の旧居が有る。

白秋は大正五年五月（三十二才）市川へ来て真岡亀井院に住んで居た。其の後江戸川を隔てた対岸の小岩村三谷、現在の東京郡江戸川区小岩に移り住んだが、此の家が「紫烟草舎」である。約一年間此処で作詩や散文の創作活動をしたのである。此の旧舎はその後居住者が変わったが、建物は、当時の面影を止めてゐる。此の程江戸川拡張工事の爲取壊しとなったが、所有者の好意で緑の深い市川市へ寄贈されたので市が保存する事となった。当時白秋が好んで江戸川辺りを散歩された事が多く作品に滲み出て居る事から、白秋に緑の深い江戸川と葛飾野が眼下に眺望出来る此の里見公園の中に移築したのである。

## 石 棺

公園の裏山中央南に有り、板のような石で組合せて作られた石棺二基が露出してゐる。此れは古墳時代後期のものと推定され勢力の有った人を葬つたものと思われる墓である。

尚此れは太田道灌が文明十一年、臼井城攻めの時、出城として築いた時、泥り出されたと云われてゐる。

## 夜泣き石

総寧寺の境内に有る高さ三十センチ程の石である。其の昔安房の国の里見軍と小田原の北条軍の間に激しい合戦があつた。戦が終つて同も無く、荒れ果てた戦場に十二（一）三の一人の美しい姫が淋しそうに彷徨い歩いていた。姫は身も心も疲れはて、そばには有つた石にもたれ弱い聲かき声で父の名を呼びながら幾日か泣き続けて居たがとう／＼息が絶えてしまった。

此の姫は北条軍に敗れて此の地で討死した里見

弘次の娘で、遠い安房の国から父の靈を弔う  
爲はるばる国府台を訪ねて来たのであった。  
姫が死んだ晩から不思議な事に、此の石から  
毎晩のように悲しそうな泣き声が聞えた。  
此の事が有つてから里人達は何時しか「夜  
泣き石」と呼ぶようになった。其れから後此  
の地を訪れた一人武士が、此の物語を聞いて  
姫を哀れみ供養した処、此の石からは泣きが  
聞こえなくなつたと云う。

法王塚 道鏡の分骨堂という

城跡遺構 境内の西端空壕の遺構

尊菜池 ヒツシイナ 国府台北方の沼池外壕に使用か

真間

真間の継橋

真間山弘法寺の参道にある朱塗の橋が「真  
間の継橋」である。此の継橋は非常に古くか  
ら有つたもので、万葉時代にはすでに架けら

れており、下に真間川が流れていたのである。  
此の継橋という名は、此の橋をつく  
る時、川の中に柱を立て、兩岸から板を掛け渡  
し中央で橋を継合せた「ハツ橋」形のものである。  
此の継橋を詠んだ歌が沃山残っている。

「新勅選集」

勝鹿や 昔のままの継橋を わすれず  
わたる 春霞かな

茲円法師

「風雅集」

五月雨に 越し行く波は勝鹿や かすみ  
かくるる 真間の継橋

雅 経

「紅塵集」

今も猶 忍びき渡る をとめ子が通いな  
れけむ真間の継橋

如藤十陰



# 手見奈靈堂

市川市真向町高台に有る弘法寺の持にて参道真向の縫橋を渡りすぐ右へ入ると此の靈堂がある。

手見奈靈堂は薄命の佳人手見奈を安産、子育ての神として、又良縁特に縁遠い娘達の祈願の靈所としての名利である。

真向山弘法寺中兴の崩山日手上人が(二五二)文龜元年靈夢を感じて建立したといわれる。

吾もみつ 人にも告げむ葛飾の

真向の手見奈が 奥津城処

山辺 赤人

その昔、真向山麓一帯は海が入りくみ、此の真向の里は小さな入江の村であつた。此の村に手見奈と言う美しい乙女が住んでいた。粗末な身なりに此へ心はやさしく氣品に溢れており、村の若者達に慕はれていた。手見奈は「夏虫の火に入る如く、港入りの船漕ぐ如く」

と万葉集にあるように多くの人々から慕われてついに身の延し方に窮し、真向の入江に身を投げて果てたと一般に語り伝えられている。

四月八日は手見奈様の春季大祭で、俗に「花祭り」といい、境内には屋台店が出て賑う。特別な祭事はないが、弘法寺で甘茶の接待がある。十月八日・九日は秋季大祭で、境内の稻荷神社との合同例祭で稻荷神社に子供神輿が出る。境内には舞台が掛り、屋台店が立ち並んで大賑な賑わいになる。此の辺では毎月八日を「十三日詣」といって、老婆たちが手見奈様の堂内に集り、踊りを踊る。

真向の井 手見奈堂の左手前に有る

紅葉の名所 江戸時代より歌人等遊ぶ

万葉集 日本文学全集一 山本建告より

勝鹿の真向の娘子を詠める歌一首并短歌

鶏が鳴く 吾妻の國に 古に ありける事と  
今までに 絶えず言ひ来る 勝鹿の 真向の

手見茶が 麻衣に 青衿着け 直き麻を 裳  
 にけ 織り着て 髪だにも 搔きは 梳らず 履を  
 だに 穿かず 行けども 錦綾の 中に 裏める  
 芥兎も 妹に 及かめや 望月の 満れる 面わ  
 に 花の如く 咲みて 立てれば 夏虫の 火に  
 入るが如く 水門入に 船漕ぐ如く 行きかぐ  
 れ 人の言ふ 時 幾許も 生けらじものぞ  
 何とすれ 身を たな知りて 波の音の 騒ぐ  
 湊と 奥津城に 妹が 臥せる 遠き代に あ  
 りける 争を 昨日しも 見けむが如も 念ほ  
 ゆるかも

反歌

勝虎の 真向の 井を見れば 立ち平し  
 水汲まし けむ 手見茶し 念ほゆ

釈

東の国に古にあった事だとして、今に至る  
 まだ絶えず言ひ継いで来ている。葛飾の真向  
 の手見茶が、麻をもって織った衣に、青い  
 衿をつけ、麻ばかりで織った裳を着て、髪を

えも梳らずに、履さえも穿かずに出歩いている  
 けれども、錦や綾の中に包んである拙蔵娘も、  
 此の女に及ぼうか、及びはしない。望月のよう  
 に整いつくしている顔に、花のように笑みを湛  
 えて立っている。夏の蛾の火に飛び入って来  
 るがように、湊入りに船を漕ぎ入れるように、  
 多くの男が言い寄って来る時に、どれほどの回  
 も生きていられやうもない人の命であろうもの  
 を、どうするとして争か、其の身を見きわめ  
 て、波の音の騒がしい湊の墓の中に臥していら  
 れる事である。遠い昔にあった争を、さながら  
 昨日目に見たことの様に見えることである。

釈 反歌

葛飾の真向の井を見ると、そこを踏んで、飲  
 用水を汲まれたであらう手見茶が思われる。

葛飾の真向娘子の墓を過ぎた時作った歌

古に ありけむ人の  
 俵文幅の 帯解き交へて

盧屋立て 妻同ひしけむ  
昔飾の 真同の手見奈が  
奥津城を 此処とは廊けど  
真木の葉や 茂りたるらむ  
松が根や 遠く久しき  
言のみも 名のみも 我は  
忘らえなくに

反歌

我も見つ 人にも告げむ 葛飾の真同の手  
見奈が奥津城処  
葛飾の真同の入江に うち靡く玉藻刈りけ  
む、手見奈し思ほゆ

状 長歌

昔あつたという男が、倭文幡の帯を解き交  
わして、仮屋を建てて寝たという、その女の  
葛飾の真同の手見奈の墓は、ここと聞いてい  
るけれども、真木の葉が茂っているからだろ  
うか、わたかまつた松の根のように年久しく  
なつたからだろうか、その在り所もさたかだ

ないけれども、その悲しい物語だけは、手見奈  
という名だけは、忘れることが出来ない。

反歌

私は見た、人にも語り伝えよう、葛飾の真同  
の手見奈の墓どころを、

反歌 二

葛飾の真同の入江の波になびく美しい藻を刈  
ったという 美しい手見奈の姿が認められるこ  
とだ

菅原道真六世の孫右中辨孝標の女が十三才の治安元年、父に従ひ上総の国府を出発し、下総を経て西下した時の事を後年思ひ出して書いたもので平安朝に於ける紀行文の白眉とされる書である。

東路の道の果よりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかは怪しかりけむを、いかと思ひはじめる事にか、世の中に物語といふもの、あなるを、いかで見ばやと思ひつ、従然なる晝間、宿居などに、姉、継母などやうの人々の、其の物語、彼の物語、光源氏の有様など、所々語る廓くにいとどゆかしさまされど、共か思ふまゝに、空に、いかでか覚え語らむ。いみじく心許なきまゝに、等身に薬師佛を作りて、寺洗ひなどして、人前に密かに入りつゝ、京に疾くあげ給ひて、物語の多く侍ふなる有る限り見せ給へと、身を捨て、額を突き、祈り申す程に、十三になる年、上らむとして、九月三日門出して、今

は、假初の假屋など云へど、風凄しく、引綿な

どしたるに、これは、男なども涙はねば、いと

寺頼に、荒々しげにて、苦と云ふ物を一言打葺

きたれば、月残りなく差入りたるに、紅の衣、

上に着て、打惱みて臥したる、月影さやうの人

には此上なく透きて、いと白く清けにて、珍し

と思ひて、搔撫てつゝ、打泣くを、いと哀れに

見捨て難く思へど、急ぎ出で別る、心地、いと

白く清けにて、珍しと思ひて、搔撫てつゝ、打泣

くを、いと哀れに、見捨て難く思へど、急ぎ出

で別る、心地、いと飽かず理なし、佛に覚えて

悲しければ、月の興も覚えす屈じ臥しぬ。

翌朝、船に車搔居ゑて渡して、彼方の岸に車

引立て、送りに来つる人々、是より皆歸りぬ、

上るは留りなどして往き別る、程、行くも、留

るも、皆泣きなどす。幼心地にも哀に見ゆ。今

は武蔵の国になりぬ。(中略)野山蘆荻の中を分くるより外の事無くて、武蔵と相模との中に在りて、あすた川と云ふは、左五中に織らせ晒させけるが家の跡とて、深き川を船にて渡る。昔の門の柱の、未だ残りたるとて、大きな柱

川の中に四つ立てり。人々歌詠むを聞きて、  
その中に、

おちもせぬ此の川柱残らずば

昔の跡を如何ぞ知らまし

其の夜は、黒戸の濱と云ふ所に泊る。片方  
方は、廣濱なる所の、砂子はる／＼と白き  
に、松原繁りて、月のいみじう明きに、風の  
音もいみじう心細し。人々をかしがりて、歌  
詠みなどするに、

微睡まじ今宵なら下は何時か見む

黒戸の濱の秋の夜の月

其の翌朝、其処を立ちて、下総の国と武蔵の  
国の境にてある太井川と云ふが、かみの瀬へ  
松里の渡の津に泊りて、一夜、船にてかつ  
た物など渡す。乳母なる人は、男なども亡  
くなくて、境にて子産みたりしかば、離れて  
別に上る。いと恋しければ、行かまほしく思  
ふに、兄なる人、抱きて率て往きたり。皆人  
立といふ前に移る。年頃遊び馴れつる所を、

あらはに寝ち散して、立騒ぎて、日の入際の、

いと凄しき渡りたるに、事に來るとて、打見遣

りたれば、人回には参りつ、頼を突きし薬師佛

の立を給へるを、見捨て奉る悲しくて、人知れ

ず打泣かれぬ。門出したる所は、廻りなども無

くて、假初の茅屋の、葺なども無し、簾懸けし

幔をど引きたり。南は遙かに野の方見遣らる。

東西は海迎くて、いと面白し。夕霧立渡りて、

いみじうおかしければ、朝寝などせず。方々見

つ、此處を立らなむ事も、衣れに悲しきには、

同じ月の十五日、雨怪暮し降るに、境を出でて

下野の國の、いかたといふ所に泊りぬ。家など

も浮きぬるばかりに雨降りなどすれば、怖しく

て、いも寝られず、野中に因だちたる所に、た

だ、木ぞ三つ立つる。その日は、雨に濡れたる

物ども乾し、國に立後れたる人々持つとて、其

處に日暮しつ。十七日の早朝立つ。昔、下総の

國に、眞野の長と云ふ人住みけり。引布を、十

むら萬むら中將の、いざ言向はむと詠みける渡

なり。中將の桌には、隅田川とあり。飯にて渡

りぬれば、相換の國になりぬ。(以下略)

註

黒戸 上総君津郡内と云ふ

太井川 今の江戸川、大日川とも云ふ

松沢の渡 武藏名所考には今の松戸と云ふ

境にて 下總と武藏の境

兄なる人 作者の兄定義の事、従四位と、

名にし買はるり 名にし買はるり いざ言向はむむ

郡島

わが思ふ人は、ありやなしやと

夫木和歌抄

わすられし（下総）の、入江のみをつし

朽ちなは袖のしるしとも見よ

民部卿烏家

かつしかの同々の浦向を漕ぐ船の

船人さわぐ波立つらしも

よみ人しらす

### 東路の都登抄

東路のつとは、永正六年七月十六日、連歌師紫屋新宗長が駿河の九子を出て、相模、武藏上野、下野等を巡遊し、江戸から下総の真向、中山、旗野、検見川、市川を経、十二月錦倉に入つた時の紀行で、「群書類從」卷三百三十九に收められてゐる。ここには下総の部のみ抄出した。宗長は駿河の人、今川義忠の近侍となつたが、宗祇に就いて連歌の蘊奥を極め、京祿五年三月、八十五歳で歿す。

抄

白川の岡のあらまし、霞とともに思ひつゝ、なむ、幾春をか過しけむ。此の秋をだにとて、永正六年文月十六日と定めて思ひ立ちぬ（中略）或る人、安房の清洲（清洲か）を一見せよかしと諺ひし江戸のたてのふもとに一宿して、隅田川の河舟にて、下総の国葛西の庄の河内を半日はかりよしあしをしのぐ折しも、霜枯は難波の浦に通ひて隠れて住みし里々見えたり。鶯鴉都鳥塚江こぐ心ちして、今井といふ津よりありて、浄土門の寺淨観寺にて、むかへ鳥人待つほど、住持出て

て物語の序に、発句所望ありしに、とかくす  
れば程ふるに、たちながら、ふじのねは遠か  
らぬ雪の十里かな

方丈の西にさし向ひ、ふじの雪曇りなく見  
え渡るばかりなり。まゝの継塔のわたり、中  
山の法華堂の本妙寺に一宿して、翌日一折な  
どありわど、発句ばかりを所望にまかせて、

杉の葉やあらしの後の夜はの雪

その夜の嵐の烈しかりしことまでなり。けふ  
はことに日も長閑にて、蕙飾の浦、春の如し。  
原宮内少、輔胤隆小弓の館の前に濱の村の法  
華堂本行寺旅宿なり。十四日、十五日、十葉  
の崇神妙見の祭祀とて、三百疋の早馬を見物  
なり。十六日は延年の遠樂、夜に入りて事し  
けてぬ。十七日連歌あり。

梓弓いそべに幾年霜の松

「梓弓磯への小松誰かよにか蕙世かけて樽を  
まきけむ」此の本歌に、小弓といふ名を加へ  
て祝し侍るばかりなり。此の館は、南付安房  
上総の山、立ちめぐり、西北は海はるばると  
入りて鎌倉山横たはり、不二の雪、半天にさ

し覆ひてみゆ。駿河國にてみるよりは猶程近  
なり。遠くてみるは近き山なりべし。十九日に  
又連歌あり。発句、嵐陰、

さえし夜の嵐やふくむけさの霜

心あたりしく風情を極せり。脇、

庭にかつちれ雪のけつ花

発句に、景氣ことつきめれば、唯けさのさまけ  
かりなり。けふは一度もする／＼として、日の  
うちに終りぬ。夜に入りて、延年の若き衆聲  
きか廿餘人、ふきはやし調へまひ唄の優に面白  
く、盃の敷きひ、百たが心地狂するばかりにて  
晩送くなりぬ。残り多かることなるべし。又、  
濱の村本行寺にして、

聲遠く月やしほひの濱千どり

嵐陰此の等三。終日心ゆきし一産なり。小弓

にて盃のたか／＼ぞれことなどいひしはたらは  
かりなる、その行方にや。あす立ちなむとする  
夜更けて来りて、月待ち出づる程もなく立歸り  
し名残、わづれぬ老のすさびに、

おもいやれ磯のね覺のもしは草敷き

捨ててうし老の白波

伴ひ来りし人の方へ、あしたに申遣し侍もな  
り、濱の村をたちて、けみ川といふ所に、浦  
尻あまり烈しかりしかば、一宿して、未だ日  
も高かりしに、人々物語の序に、一折などの  
ことにて、

玉がしは葦にうつもれぬあうれかな

可睡軒ここまで打送りて、旅宿の慰めとりど  
りにして、翌日市川といふわたりの折ふし一  
雪風吹きて、しばし休らう間に、向ひの里に  
いひあはする人ありて、馬ども乗りもてきて、  
頓て舟渡りして、蘆の枯葉の雪打拂ひ、善養  
寺といふに落ちつきぬ。面白かりし朝なるべ  
し、此處は炭薪などもまれにして、蘆を折り  
たき豆腐をやきて、一盃を勧めしげ、都の柳  
もいかに及ぶべからむとぞ。興に入り侍りし。  
けふの暮程に、會田彈正忠祐の宿所にして、  
夕めしの後も色々のことにて夜更けぬ。明日  
廿五日とて、連歌の催しに、  
堤行く野は冬かれの山路かな  
市川、隅田川ふたつの中の庄なり。大堤四方  
に繞りて、折しも雪ふりて、山路を行く心ち

侍りしなり。江戸に歸りつきて又の日、館にし

月や江による波た、む朝ごほり  
(下略)

粧

葛西 南葛飾郡

小弓 千葉郡生濱町生實

濱野村 生濱町濱野

けみ川 千葉郡検見川町

善養寺 東京郡江戸川区小岩

宗長 今川義忠の臣で、祖は応永、康正

文明と代々刀匠の家柄で、島田義

助五代の孫、島田治家の子永正六

年は彼六十九才の時の作と云ふ。



# うちわ太鼓で朝明け——柴又帝釈天

柴又といえば「帝釈天」で、広く知られている。駅を降りると門前通り、そこを五分も歩くと、入口の二天門に着く。

帝釈天は、日蓮宗経栄山題経寺にある。この寺は、寛永六年（一六三二）、本山日忠上人によって創建されたもので、中山にある法華経寺の末寺となっている。帝釈天の縁日は、庚申にあたる日。それは、日蓮彫刻の折掛本尊帝釈天が不明になり、本堂再建のときに見つかったのだが、その日が庚申の日であったから、という。

縁日は昔から参詣者が多い。今日でも朝早くから柴又駅を降りると、うちわたいこを、ドンツクドン・ドンツクドンとたたきながら帝釈天へ向かう。こんな風景は、他の寺院では見られない。

二天門に安置している「二天像」は、幕府時代の仏師定朝法橋のもの、という。

本堂内外にある「十二支」「日蓮上人一代記」の彫刻などは優雅なもので、中でも、内陣彫羽目一〇枚の彫刻は、当時一流といわれた彫刻家一〇人によって、一五年の歳月を費やして完成されたものである。

また、境内にある寶鏡湖の名鏡、横に長く杖を伸ばす瑞龍松など、目につくものが多い。

ところで、最近若い人たちが多く訪れて来る。信者とか、お詣りに、というものでない。人気映画・トラさんシリーズの「男はつらいよ」の舞台になったからだ。

門前通りは、名物の「なだんご」を、温せんべい、餅上菓具の「はじき餅」などを並べた店々が軒を並べているが、最近では「トラさんせんべい」とらさんが身につけていた「シャツ・ステテコ・腹まき・手ぬぐい」まで並べられている。

この具合だと、そのうちに「帝釈天」といつしよに「トラさん」も祭られるのではないか、と思いたくなる。

明治三三年（一九〇〇）、常磐線金町駅ができると、この方面からの参詣者の便利を図ろうと人車鉄道が設けられ、柴又名物として人気を呼んだ。（六ページ参照）

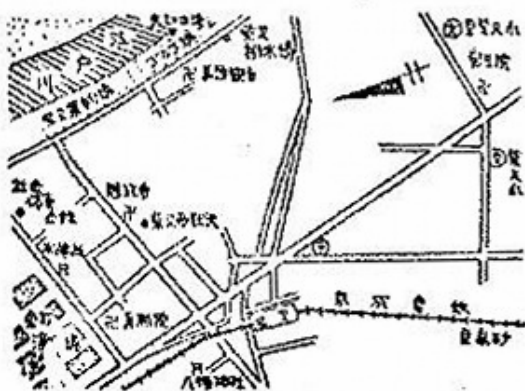
勝俣から 正倉院古書によると、一二〇〇年前には、柴又を「鳴俣」と記し、当時、四二戸の家と三六〇人の人々が農耕生活を営んでいたと記されている。

## 柴又八幡宮

駅の西側に「柴又八幡宮」（柴又三丁目）がある。

創立はいつころかはつきりしていないが、所蔵されている棟札に、寛水一〇年（一六三三）に本殿が再建

……などから、かなり古くからのもの、といわれている。





神社の裏側本殿の下に、石棺に使用した石材の一部が露出しているが、これは、古墳を利用して社殿を建てたものでないかと考えられている。なお、社殿新築の時、石棺などの調査が行われ、竪穴式石室であることが明らかになった。また、越前町簡須恵器の破片、直

刀・刀子の残欠、朱塊、人骨なども発見され、かなり豪族の墳墓と思われる。出土遺物その他の状態から、一三〇〇―一四〇〇年以前のもので推定されている。この古墳を「鳥居塚」と呼んでいる。

境内には他に「親農事積碑」が建っている。これは、江戸時代の中頃、関東の大洪水、飢饉にめげず、柴又村の名主・斎藤七郎衛門らが協力して、近郷第一の高有村にした、ということと幕府から賞されたことを記念したものである。

## 矢切りの渡し

帝釈天を後にして進むと、江戸川にあたる。ここに「矢切りの渡し」といわれる千葉・松戸に通じる渡舟場がある。

この渡舟場は、江戸の初めにはすでに開始されていたので、かなり古くからあったのではないかと、といわ

れている。

国府台の古戦場はこの矢切りの渡しの一帯とか、江戸川をはさんで、天文七年（一五三八）、里見勢と北条勢が、また、永禄七年（一五六四）にも里見勢と北条勢が、父子二代にわたって大合戦を交えたところである。

現在、この川原一帯は、野球場、競技場などがあり、また、土手づたいを、江戸川ハイキングコースとして楽しめるところになっている。

## 柴又七福神

京成曳舟駅のところで、隅田川七福神を紹介したが、高砂から柴又にかけて「柴又七福神」というのがある。

寿老人 親蔵寺 高砂五―五  
福祿寿 崇福寺 高砂七―一三  
大黒天 宝生院 柴又五―九  
恵比寿 医王院

布袋尊 良観寺  
弁財天 真勝院

毘沙門天 廻経寺  
柴又七―一〇

この中で、宝生院の大黒天は「出世大黒天」といわれ、豊臣秀吉が守護神としてだいにし、それを徳川家康が譲りうけたものと、といわれている。



宝生院大黒天